

# 江戸における『国性節合戦』の受容

—淨瑠璃抄録物草双紙の視点から—

高橋則子

演劇研究の視点から、「国性爺合戦」の淨瑠璃抄録物草双紙に考察を加え、残存上演記録の少ない江戸での淨瑠璃「国性爺合戦」受容の問題を、特に出版物の側面から考えたい。

関西大学図書館蔵の一「国性爺合戦」と整理書名のついた初期草双紙を、青本「国せんや合戦」とする。<sup>[1]</sup>青本「国せんや合戦」は、

画工の活躍年代等から、享保後期から宝暦初年までに初板刊行されたと思われる。内容は近松門左衛門作淨瑠璃『国性爺合戦』初段から五段目までのほぼ忠実な抄録物であるが、三段目の国性爺老母の自害は絵・文共に描かれない。

黒本『こく性や合戦』は、净瑠璃二段目から五段目までの抄録物草双紙である。<sup>(2)</sup>画工の活躍時期や筆致等から、安永初期位の刊行と推測される。内容は、淨瑠璃二段目の鳴蛤の場面から始まり、千里が竹での虎との格闘が強調して描かれ、三段目は簡略化され、四・五段目は和藤内の勇猛さを中心に描かれている。

江戸での淨瑠璃『国性爺合戦』の上演記録は、現在のところ近世期を通じて五回しか見いだせない。加えて淨瑠璃上演は三段目を中心としており、これらの淨瑠璃抄録物は、淨瑠璃上演に即した草双紙ではない可能性がある。

黒本『こく性や合戦』には、青本『国せんや合戦』と構図的類似が認められる箇所が複数あり、両書共に二代目市川團十郎の歌舞伎からの影響がある。また黒本『こく性や合戦』は、上方出版の浄瑠璃絵尽し本『国性爺合戦』・浮世草子『国性爺御前軍談』挿絵をも参照している。

黄表紙【和藤内三舛若衆】・【和藤内九仙山合戦】は、寛政五年（一七九三）に初板刊行され、以後二回改題後摺りして刊行されてゐる。一丁表には豊竹座の櫻紋のある劇場が描かれ、淨瑠璃抄録冊であることを強調している。そして青本「国せんや合戦」との構図的類似性が強く見受けられ、青本を黄表紙風に書き直したものと言える。

天保五年（一八三四）刊合巻『国性谷合戦』は、口絵等を除く十六丁のうち二十一丁は淨瑠璃初段から三段目まで占められている。三段目までに該当する本文は、淨瑠璃をかなり忠実に用いているが、絵は、青本・黒本・黄表紙・挿絵入り七行本『座敷操御伽軍記』を参照している。三段目が占める割合が増えていているにも関わらず、国性爺老母の自害は絵画化されない。また、九仙山の場面のみ淨瑠璃舞台の画面で描かれているが、付舞台でのからくりによる戯

闘場面は描かれていない。

これらのことから、江戸草双紙での『国性爺合戦』受容は、三段目の老母自害は簡略化される傾向があり、市川家の荒事と結びつけた形で受容されたこと、江戸における多数の淨瑠璃抄録物草双紙の出版には、享保の改革による方向付けや寛政の改革による出版統制の影響があることなどを考察したい。

### 一 青本『国せんや合戦』と淨瑠璃

関西大学図書館蔵の青本『国せんや合戦』（二世鳥居清信画・刊年未詳・村田屋板）は薄黄色無地の原表紙で、内容と無関係な「曾我十番切」（寛政六年刊・西村屋板）の貼題簽を付す。題簽は後人が貼付したと思われる。表紙やや左側に「和藤内出世物語」と墨書きされると、この書名は『国書総目録』・『日本小説書目年表』とともに記載がなく、何に依ったのかは不明である。

青本『国せんや合戦』は『草双紙と読本の研究』の「鳥居派」鳥居清信の項に、六丁表の絵とともに紹介されたものと同板本と思われる。青本『国せんや合戦』（以下青本と略称する）の梗概を記す。  
【梗概】（1オ～2オ）大明國思宗烈皇帝の許へ韃靼王からの使者梅勒王がきて、懷妊中の后、華清夫人を所望した。李踏天は左の目をくり抜いて秘かに内通の意を示したため、使者はそのまま帰る。（2ウ・3オ）皇帝は妹梅檀皇女を李踏天にめあわせようとして、女官達に花軍を行わせる。（3ウ・4オ）呉三桂が諫言する所へ、梅勒王と李踏天が押し寄せ、皇帝は李踏天に殺される。（4ウ・5オ）呉三桂は敵弾に当たって落命した后の胎内から若宮を取り出し、代わりに我が子を刺し殺して胎内へ入れる。（5ウ）呉三桂の妻柳歌君

は梅檀皇女に従つて港まで落ち、皇女を船に乗せて日本へと渡らせる。（6オ）日本肥前の国松浦の郡の和藤内<sup>わとうない</sup>という漁師は、浜辺で鳴蛤の争いを見て軍法の奥義を会得する。（6ウ～8オ）和藤内の父老一官は、明の旧臣鄭芝龍<sup>よしりゆう</sup>であり、折から日本に漂着した梅檀皇女から明朝の危機を伝えられ、和藤内親子三人は二手に別れて渡海する。（8ウ～10オ）千里が野辺の竹林で唐人達の虎狩りに出会つた和藤内と母は、伊勢神宮の神威によつて虎をてなづけ、軍兵達の頭を日本風に剃つて配下に組み入れる。（10ウ・11オ）老一官の幼くして別れた娘、錦祥女の夫五常軍甘輝を味方にしようと、和藤内らは獅子が城にやつてくる。（11ウ～13オ）甘輝不在のため、母のみ縄をかけて城内に入る。甘輝が承諾すれば白粉を流し、不承知なら紅を流す約束をする。（13ウ）夫甘輝が得心しない様子を見て、錦祥女は自害する。（14オ）甘輝は和藤内に対面して良き大将と思い、味方につく。（14ウ～16オ）日本に残された和藤内女房小むつは、若衆姿となり木刀の練習をしている。折しも松の木が真剣の如くに切れたので、渡海する決心をする。（16ウ・17オ）小むつと梅檀皇女は、住吉明神の加護を得て無事唐土に着く。（17ウ～20オ）呉三桂は山中で秘かに若宮を養育しており、九仙山で碁をする二人の老人から、和藤内の加勢を教えられ、その戦いぶりを見せて貰うが、その間いつしか五年の歳月が流れていた。（20ウ～22オ）そこへ老一官、梅檀皇女、小むつが現れ、敵兵も押し寄せるが、呉三桂らは雲の懸け橋のはかりごとで敵兵を破り、碁盤を武器にして戦う。（22ウ・23オ）国性爺・呉三桂・甘輝が戦の評定をしていると、老一官が韃靼勢の籠もる城へ赴いたとの知らせがくる。（23ウ～25オ）老一官を人質とするが、知略によつて首尾よく韃靼勢を滅ぼす。（25ウ）太子を即

位させて御代の万歳を祝う。

青本は、近松門左衛門作淨瑠璃『国性爺合戦』（正徳五年十一月初演・一七一五）初段から五段目までのほぼ忠実な抄録物草双紙であり、あらすじの改変は、諫言する吳三桂を帝が踏みつけると、額に書かれた「大明」の字が碎け散る箇所が省略されている部分と、甘輝が和藤内に味方する決意をするに至る経緯が簡略化されている箇所である。前者はからくりの見せ場であるためか、淨瑠璃絵尽し本等には必ず描かれている。また後者は、淨瑠璃三段目切の最も多く上演される場であるにも関わらず、和藤内老母の自害が画文共に全く触れられていない。

青本と特に類似性の認められる淨瑠璃絵尽し本等はない。淨瑠璃『国性爺合戦』には、多くの「読み物」としての作品が現存しております、絵尽し本『国性爺合戦』（正徳六年夏頃成か・一七一六・大坂山本九兵衛板）、浮世草子『国性爺御前軍談』（西沢一風か・享保元年刊・一七一六・京都菊屋長兵衛板）、浮世草子仕立淨瑠璃本『座敷操御伽軍記』（刊年未詳・上方板）等がある。青本はこれらの上方出版物挿絵に比べ、絵画化する箇所や画面の構図に独自性が認められる。

近松作淨瑠璃『国性爺合戦』は、大坂竹本座での初演時には十七ヶ月即ち三年越しの大当たりを取った作品である。しかしながら現存する江戸上演記録は、非常に少ない。『義太夫年表 索引篇』（義太夫年表近世篇索引刊行会・平成二年刊・一九九〇・八木書店）によると、江戸での『国性爺合戦』の上演記録は次に記す如く、近世期を通じて五回しか見いだせない。

享保四年（一七一九）十一月 劇場未詳 手妻人形 詳細不明

安永三年頃（一七七四） 肥前座 三段目の口（楼門）

天明五年頃（一七八五） 結城座 三段目（紅流しの評のみ）か

天保十一年（一八四〇）一月 結城座 三段目・四段目道行のみ  
安政二年（一八五五）十月以降 劇場未詳 三段目

江戸上演の残存記録が少ない状況からは確定的な論証は避けるべきであるが、江戸上演は三段目中心である可能性がある。一方上方では、近世期五十三回もの上演記録が存在し、初演から宝暦七年（一七五七）までの竹本座上演は、五段目までの通し上演である。しかしそれ以降は、初段から三段目まで、或いは三段目のみといった場合が多く、四段目九仙山の上演は、宝暦十一年（一七六一）竹本座、安永元年（一七七二）伊勢中之地蔵、天明年間東竹田芝居藤川菊松座、文化三年（一八〇六）道頓堀大西芝居、天保十四年（一八四三）道頓堀若太夫芝居と五回のみである。

これらのことから青本は、淨瑠璃の江戸上演に即さずに刊行された草双紙である可能性がある。

## 二 青本『国せんや合戦』と黒本『こく性や合戦』

国立国会図書館蔵の黒本『こく性や合戦』は、安永初年頃の刊行かと思われる、鳥居清満画村田屋板の三巻一冊の作品で、黒色無地の原表紙、外題と絵が一枚に摺られた貼題簽が一枚付く。

黒本『こく性や合戦』（以下黒本と略称する）は、淨瑠璃『国性爺合戦』二段目から五段目までの抄録物草双紙である。黒本全十五丁のうち、二段目が六丁、三段目が二丁、四段目が六丁、五段目が一丁半に纏められていて、二段目と四段目に重点が置かれた構成にな

つてゐる。

黒本は青本と構図的類似性が見いだせる部分がある<sup>(5)</sup>。青本六丁表の鳴蛤の構図（図①）が黒本一丁表（図②）と、青本八丁裏・九丁表の虎との格闘の構図（図③）が黒本三丁裏・四丁表（図④）と、青本九丁裏・十丁表で頭を剃られる唐人が、自分で髪を板状のものに受けている図（図⑤）が、黒本五丁裏（図⑥）と、青本十六丁裏・十七丁表の小むつと梅檀皇后が大海童子に助けられて渡海する図（図⑦）が、黒本八丁裏・九丁表（図⑧）と類似している。例えば図①②の鳴蛤の争いを見る和藤内は、中央や右側に立ち、厚綿の上着を両脇脱ぎにし、衣裳は大格子の模様となつていて、これは、二代目市川団十郎の歌舞伎舞台姿を描く『金之揮』（近藤清春画・享保十三年刊・一七二八）享保二年五月の図（図⑨）や鳥居清倍画の役者絵（図⑩）と類似している。特に図①は、鉢巻きをやや斜めの位置で結ぶ所まで類似している。更に図③④の虎との格闘場面は、大太刀を左手に、大格子の厚綿を半分脱ぎ、鉄打胴丸かと思われる衣裳を着込み、二色の太綱状の丸絹け帯を締める。どちらの虎も、脚の付け根部分が渦巻き状に描かれ、母親の衣裳模様も一致している。このような国性爺の描かれ方は、『金之揮』享保十二年三月の図（図⑪）、同じく享保十二年の「国性爺竹抜五郎」を描いたと思われる鳥居清倍画役者絵（図⑫）、それと筆致の類似した画者未詳の役者絵（図⑬）、奥村政信画役者絵（図⑭）と、衣裳に三升紋が入る等の微細な違いはあるものの、類似している。鳥居清広画役者絵（図⑮）も同様の衣裳であるが、画工の作画期より宝暦期のものと推定する。すると、これは四代目市川団十郎を描いたものと考えられる。

これらのことから、黒本は青本を参照したことがわかる。更に二書共に、二代目市川団十郎の歌舞伎からの影響が考えられる。

### 三 二代目市川団十郎の国性爺歌舞伎

淨瑠璃『国性爺合戦』初演の二年後である享保二年（一七一七）五月、江戸三座で『国性爺合戦』は歌舞伎化される。そしてこれは『只誠案、義太夫節』淨瑠璃狂言を江戸歌舞伎狂言にて興行の事、此年此月中村座を始とす<sup>(6)</sup>ともされる。『金之揮』には「しきはまぐりのぐん法時むねからわとう内のもちこみ狂言のしくみよけれ共りとうてんの役なき故不當り也」とあるが、役者評判記『役者三幅対』（享保三年正月刊）中村座の市川団十郎評には「国性爺の狂言江戸三芝居で市村座大当なれ共……和藤内蛤の所は市川殿に上こすはおりない」とされる。

二度目の江戸での歌舞伎化は享保十二年（一七二七）三月中村座上演の『国性爺竹抜五郎』である。役者評判記等の記録は残らないが、二匹の虎を足下に踏まえた複数の役者絵の存在により、狂言が大当たりであったことを推測させる。三度目の享保十五年（一七三〇）四月中村座上演の『唐錦国性爺合戦』では、「御停止之諸品」を用いたとして罰せられている。『旧記拾要集』卷十二「享保十五年四月廿九日御用覺書抜」に、「堺町勘三郎（六世）抱役者市川団十郎（二世）、足駄ニ銀箔を付、狂言いたし候由相聞候。箔付儀、御停止ニ有之候所、不届ニ被思召候間、相改可申旨……」とあり、足駄に銀箔を付けた点が咎められたことがわかる。団十郎らは五月二日に呼び出されて御叱りの上、足駄は御番所にて打ち割られたとある。こうした处罚は、二代目団十郎の国性爺が大評判であつ

たために、見せしめとして行われたものであるようにも思われる。

更に四度目の宝暦六年（一七五六）七月中村座上演の『月湊英雄

鑑』では、二代目市川海老蔵（二代目団十郎）は「国性爺作者近松門左衛門実は緒方三郎」の役で、和藤内は四代目市川団十郎が演じた。役者評判記『役者真壺録』（宝暦七年正月刊）の市川団十郎評に、「どつと落がないといへばまだ有／＼七月かはり國せんやの不印シ、芝居近所では三升が和藤内の役じやげなども、いふたが山の手へん、芝筋では根からざたもないとうはさ也。」とあり、四代目団十郎の和藤内が不評であったことがうかがわれる。二代目団十郎とは芸風の違う四代目の和藤内は、江戸歌舞伎愛好者達には馴染まなかつたようである。先の鳥居清広画の和藤内（図15）は、この時のものと考えられる。五度目の安永二年（一七七三）五月中村座上演の『大日本伊勢神風』では、七草四郎本名和藤内三官を三代目市川海老蔵こと四代目団十郎、平戸のあま小弓を四代目岩井半四郎、老一官を大谷友右衛門、船頭与次兵衛実は赤松彦五郎教祐を中村仲蔵、細川勝元を四代目松本幸四郎、源頬兼を二代目市川八百蔵、井筒女之助を二代目市川門之助が演ずるという、人気役者揃いの上演であった。この時、今川仲秋を坂東又太郎が演じ、坂東善次と中村此蔵の虎との大立があつたという。東山の世界とのない交ぜで、詳細未詳ながら、原作淨瑠璃とはかなり離れた内容と思われる。役者評判記『役者有難』（安永三年正月刊）の海老蔵評に「夏の和藤内はは

やり病におされた」とあり、『増訂武江年表』（斎藤月岑・東洋文庫・昭和四十三年刊・一九六八）安永二年の項にも、「〇三月末頃より、疫病行はれ人多く死す（江戸中にて三月より五月まで凡そ十九万人疫死と云ふ。大方中人以下なり）。御救として朝鮮人参を給はる。」

とある。人気役者揃いながら、大当たりまでは至らなかつた様子が伺われる。

以後、安永七年（一七七八）七月森田座上演の『国性爺合戦』は、四代目坂東又九郎（八代目森田勘弥）の和藤内、初代尾上松助の甘輝で、辻番付の役名からは、二段目虎退治と三段目が上演されたと思われる。役者評判記『役者男紫花』（安永八年正月刊）には、尾上松助評に「国性爺に大太郎殿と両人虎の大評判」とあり、松助と中村大太郎が、虎役で評判を取つたことが伺われる。和藤内の評判はない。天明六年（一七八六）五月森田座上演の『国性爺合戦』は、辻番付の役名から、初段から三段目まで上演されたことがわかる。役者評判記『役者吉書始』（天明七年正月）に評判は記されないが、和藤内は、安永七年上演時と同じ八代目森田勘弥である。

以上のことから、草双紙が黄表紙期に移行するとされる安永四年頃（一七七五）までで、江戸における国性爺もので強く印象を残したのは、二代目市川団十郎の歌舞伎荒事としての虎退治、かつその影響下にある他役者による虎との大立であつた。これらのことから、青本・黒本は共に、二代目市川団十郎の歌舞伎舞台での『国性爺合戦』の荒事の演技を踏まえた草双紙である、と言えよう。

#### 四 淨瑠璃絵尽し本・浮世草子と黒本『こく性や合戦』

黒本は青本との部分的な類似が認められる作品であるが、更に絵尽し本『国性爺合戦』・浮世草子『国性爺御前軍談』挿絵をも参照していると思われる。黒本二丁裏三丁表の小むつを櫂で打とうとし、梅檀皇女を小むつに預ける図は、絵尽し本『国性爺合戦』に描かれているものである。更に虎退治の場面での安大人の死も絵尽し本

『国性爺合戦』に描かれる。黒本六丁裏・七丁表の和藤内一行に鉄砲を向ける図は、浮世草子『国性爺御前軍談』挿絵に見られ、和藤内母の自害は、構図的にも『国性爺御前軍談』挿絵のその部分と類似する。九丁裏の吳三桂の描かれ方や十一丁裏・十二丁表の焰烙火矢の図も、『国性爺御前軍談』挿絵を参照した可能性が考えられる。<sup>8)</sup>

このように黒本は、青本のみならず、上方で出版された淨瑠璃絵尽し本『国性爺合戦』、浮世草子『国性爺御前軍談』挿し絵を参照して作られたものであることがわかる。これは、当時の板元に、享保年間からの出版物の集積があり、草双紙の制作指示をしていたことを想像させる。こうした板元の作品制作への積極的な関与は、既に寛永期京都において行われていたとの指摘<sup>9)</sup>があるが、江戸においても、情報・出版文化が高度に発達した明和・安永期には、同様のことが行われていたと判断される。

黄表紙『(和藤内三舛若衆)』・『和藤内九仙山合戦』(以下黄表紙と略す)は、内容的には淨瑠璃初段の明朝滅亡に、両書を併せた全体の三分の一以上も費やされる点が特徴的であるが、青本と類似した構図が多く見受けられる。以下黄表紙が、青本の構図を利用すると思われる箇所を挙げ、適宜図で示す。以下、黄表紙をAとし、青本をBとする。

A一丁裏・二丁表 思宗烈皇帝が華清夫人の懷妊を喜び乳母と対面  
B一丁表

『国せんや合戦』

前出の青本・黒本と同板元の村田屋は、寛政年間に青本を黄表紙風に書き直した、淨瑠璃五段を抄録した作品を刊行している。

黄表紙『(和藤内三舛若衆)』・『和藤内九仙山合戦』は、『黄表紙総覧 中篇』(棚橋正博・平成元年刊・一九八九・青裳堂書店)では、

A二丁裏・三丁表 鞍靼の使者の申し出を李踏天が巧みに断る  
(図⑯A) B一丁裏・二丁表 (図⑯B)

A三丁裏・四丁表 皇帝と梅檀皇后が結婚をめぐり花軍  
B二丁裏・三丁表

A四丁裏・五丁表と七丁表 鞍靼の奇襲で皇帝死す  
B三丁裏・四丁表

A八丁裏・九丁表 梅檀皇后を妻に託し胎内より皇子を取り出す  
B四丁裏・五丁表

柳歌君は追つ手の降達を懼で打つ

『国性爺合戦』に描かれる。黒本六丁裏・七丁表の和藤内一行に鉄砲を向ける図は、浮世草子『国性爺御前軍談』挿絵に見られ、和藤内母の自害は、構図的にも『国性爺御前軍談』挿絵のその部分と類似する。九丁裏の吳三桂の描かれ方や十一丁裏・十二丁表の焰烙火矢の図も、『国性爺御前軍談』挿絵を参照した可能性が考えられる。<sup>8)</sup>

このように黒本は、青本のみならず、上方で出版された淨瑠璃絵尽し本『国性爺合戦』、浮世草子『国性爺御前軍談』挿し絵を参照して作られたものであることがわかる。これは、当時の板元に、享保年間からの出版物の集積があり、草双紙の制作指示をしていたことを想像させる。こうした板元の作品制作への積極的な関与は、既に寛永期京都において行われていたとの指摘<sup>9)</sup>があるが、江戸においても、情報・出版文化が高度に発達した明和・安永期には、同様のことが行われていたと判断される。

黄表紙『(和藤内三舛若衆)』・『和藤内九仙山合戦』(以下黄表紙と略す)は、内容的には淨瑠璃初段の明朝滅亡に、両書を併せた全体の三分の一以上も費やされる点が特徴的であるが、青本と類似した構図が多く見受けられる。以下黄表紙が、青本の構図を利用すると思われる箇所を挙げ、適宜図で示す。以下、黄表紙をAとし、青本をBとする。

A一丁裏・二丁表 思宗烈皇帝が華清夫人の懷妊を喜び乳母と対面  
B一丁表

『国せんや合戦』

前出の青本・黒本と同板元の村田屋は、寛政年間に青本を黄表紙風に書き直した、淨瑠璃五段を抄録した作品を刊行している。

黄表紙『(和藤内三舛若衆)』・『和藤内九仙山合戦』は、『黄表紙総覧 中篇』(棚橋正博・平成元年刊・一九八九・青裳堂書店)では、

A二丁裏・三丁表 鞍靼の使者の申し出を李踏天が巧みに断る  
(図⑯A) B一丁裏・二丁表 (図⑯B)

A三丁裏・四丁表 皇帝と梅檀皇后が結婚をめぐり花軍  
B二丁裏・三丁表

A四丁裏・五丁表と七丁表 鞍靼の奇襲で皇帝死す  
B三丁裏・四丁表

A八丁裏・九丁表 梅檀皇后を妻に託し胎内より皇子を取り出す  
B四丁裏・五丁表

柳歌君は追つ手の降達を懼で打つ

B五丁裏

A十一丁表 鳴蛤の争いを見る国性爺 B六丁表

A十四丁裏・十五丁裏 千里が竹で虎退治をし韃靼の兵を従える

A十六丁表 獅子が城に至り、唐人の門番と話す  
B八丁裏・十丁表

A十六丁裏・十七丁表 横門に現れた錦祥女と対面  
B十一丁表

A十七丁裏・十八丁表 繩められた母を歓待する錦祥女・甘輝  
(図17A) B十二丁裏・十三丁表 (図17B)

A十八丁裏・十九丁表 錦祥女の自害と国性爺・甘輝の同盟  
(図18A) B十三丁裏・十四丁表 (図18B)

A十九丁裏・二十丁表 九仙山で碁を闇む二老人と会う吳三桂  
B十七丁裏・十八丁表

A二十丁裏 国性爺女房小むつと梅檀皇女は明に旅立つ  
B十六丁表

A二十一丁表 老一官と吳三桂は九仙山で追つ手と戦う  
B二十一丁裏

A二十二丁裏・二十二丁表 二老人は先祖皇帝と告げて消える  
B十九丁裏・二十丁表

A二十三丁裏・二十四丁表 南京城に老一官は生け捕られる  
B二十三丁裏・二十四丁表

A二十四丁裏・二十五丁表 李踏天を殺し韃靼王を捕らえる  
B二十四丁裏・二十五丁表

A二十五丁裏 新帝永曆帝の即位を祝す B二十五丁裏

黄表紙全二十五丁のうち約二十丁は、青本の画面構図を利用して  
おり、最も淨瑠璃上演度数の高い三段目の描かれ方が簡略化され、  
国性爺老母の自害が画文共に省略されているといった特徴も同じで  
ある。また、青本本文を参照したと思われる部分が数箇所ある。つ  
まり黄表紙は、青本を当世風な画面に描き直して再び刊行したもの  
である。そしてこの黄表紙は何度も後摺り本が出ていることから、  
当世風に描き直した工夫は成功したと言えよう。

ところで黄表紙の一丁表には豊竹座の櫛紋がある劇場表側が描か  
れている(図19)。淨瑠璃上演に即した刊行を想像させるが、寛政  
年間における淨瑠璃『国性爺合戦』の上演記録は江戸上方共にな  
むしろこれは、寛政年間に淨瑠璃抄録物黄表紙が多く出版された現  
象の一つの事例にすぎない。

寛政の改革の一環として、寛政二年(一七九〇)五月、書籍や草  
双紙・一枚絵に出された町触10の中、「其外品々享保年中相触候處、  
いつとなく相ゆるみ」、「一 近年子供持遊ひ草紙絵本等、古代之事  
によそへ、不束成儀作出候類相見候、以来無用に可致候、但、古  
來之通質朴に仕立、絵様も常体にいたし、全子供持遊ひに成候様致  
候儀は不苦候」、「一 浮説之儀、仮名書写本等に致し、見料を取、  
貸出候儀致間敷候、但、淨瑠璃本は制外之事」とある。幕政批判に  
結びつくような、現實に起こった事件を仄めかすことを禁じ、実録  
に仕立てて貸本にすることを禁じているが、淨瑠璃本は制外とされ  
ている。即ち子供の玩弄物であることを建前とした草双紙で、本書  
黄表紙のように淨瑠璃の筋書きであることをあえて標榜するような  
作品を刊行することは、寛政年間の板元にとって、最も安全な出版  
の方法であった。そして、『享保撰要類集』所収の享保六年(一七

二二) 閏七月の箇所には、「一狂言本并淨瑠璃本 右芝居にて狂言にいたし候事 浄瑠璃座にてあやつりにいたし候事を 其假致板行候儀は不苦候事 一慰本 右狂言にも不致義を狂言の様に作り成し無筋事を草紙に綴り 二三冊あるひは四五冊物にいたし 近来京都より差下し江戸にても綴申候 此等の類向後無用にいたし 若京都より差出し候歟 新規に致板行候は、奉行所え可訴出事 一子共覗ひ草双紙并一枚絵 右子共一通りにいたし候草紙又は人形草花の類一枚紙半切等に致板行候儀は不苦候事」とあることから、淨瑠璃抄録物である青本も、享保改革による出版統制に方向付けられて刊行された可能性がある。<sup>[12]</sup>

江戸草双紙における淨瑠璃抄録物の多さは、享保改革や寛政改革による出版統制が特に厳重であった江戸において、淨瑠璃が「制外」と見なされ緩やかな扱いを受けたために、安全な出版を志向した板元によつて選択されたものと考へることもできよう。

## 六 合卷『国性谷合戦』

合卷『国性谷合戦』(墨川亭雪丸作・歌川国虎画・天保五年刊・一八三四・山本平吉板)（以下合卷と略称する）は、六巻三冊、多色摺り錦絵表紙が三枚続き役者絵になつており、七代目市川団十郎の和藤内の虎退治が描かれている。<sup>[13]</sup>但し七代目団十郎が虎退治を演じたという記録はなく、文化十三年（一八一六）閏八月江戸中村座上演歌舞伎は三段目のみである。また、本書は、天保年間に墨摺り表紙で役者似顔絵を改刻した後摺り本、嘉永年間に改題後摺り本『絵本国せんやかつせん』として刊行されている。後者は表紙のみ八代目市川団十郎の似顔象嵌になつてゐる。嘉永三年（一八五〇）五月江戸中

村座上演歌舞伎も三段目のみである。但し天保十四年（一八四三）六月河原崎座上演歌舞伎は、初段から三段目まであり、八代目団十郎が虎退治を演じたと思われる。後摺り本は天保十四年上演時刊行のものと、天保十四年上演時の八代目団十郎による虎退治の記憶を利用した表紙での、嘉永年間刊行のものと思われる。

本書は全三十丁で、序文半丁、口絵三丁、祝儀的な絵と廣告の半丁を除き、内容に関わる二十六丁のうち淨瑠璃初段から三段目までの部分が二十一丁半を占める。三段目に該当する部分は、本文は七丁半であるが、絵は小むつが武芸鍛錬をする四段目のものとなつてゐる箇所が一丁半ある。つまり絵としては、初段から三段目までは二十丁となる。そしてこの三段目までの部分は、筋展開に直接関与しない箇所を除き、淨瑠璃本文をかなり忠実に引用している。

絵は、前述した青本を主に利用し、部分的に挿絵入り七行本『座敷操御伽軍記』・黒本・黄表紙を参照している可能性がある。青本とは、花軍の構図が類似する。また、虎狩りの唐人達を従え、日本風の頭に剃る場面の構図も青本に類似する。更に日本に残された小むつが武芸鍛錬をする場面も青本にしかない。また、李踏天を殺す大団円の構図も青本に類似している。こうした複数場面の類似から、黄表紙の時と同様に、合卷においても、青本を参照したと思われる。また、七行本『座敷操御伽軍記』とは、吳三桂の額を皇帝が踏みつけると、大明の字が碎ける場面が類似する。黒本とは、梅檀皇女を乗せた船に取りすがる女房小むつを、櫂で打とうとする場面が類似する。黄表紙とは、獅子が城の描き方が類似する。

注目すべきは、前出の抄録物草双紙に比べ、淨瑠璃三段目本文の占める割合が圧倒的に増えているにも関わらず、合卷にも国性爺老

母の自害が絵画化されていない点である。また、九仙山の場面のみ淨瑠璃舞台の画面で描かれている（図20・21）が、「昔操座のかゝりは、此やうなものにはあるまじけれど、此草子は唐人ばかり多く、愛敬薄からんとて、作者のわざくれなり。好古のご見物方怪しみ給ふことなかれ」（適宜漢字句読点をあてた）とあり、付舞台でのからくりによる戦闘場面は描かれず、既に九仙山の舞台が未詳となつていることが伺われる。

## 七、江戸での『国性爺合戦』受容の問題点

淨瑠璃『国性爺合戦』は、興行とは遊離したところで、作者の神格化と共に、非常に高い評価を得ていた。<sup>(16)</sup>更に上演とは関わりなく、素淨瑠璃で『国性爺合戦』は多く語られていた。

奥付に文化十三年製造とある、江戸西宮新六板の『ひらくら 稽古

本目録』に、『国性爺合戦』は、「二の口 鳴蛤の段」「二の切 虎狩の段」「三の口 横門の段」「三の切 紅流しの段」「四段目 九仙山の段」とある。加えて、近松淨瑠璃は読書の対象でもあった。<sup>(17)</sup>故にこれらの江戸草双紙での淨瑠璃『国性爺合戦』の抄録化は、素淨瑠璃や読書の対象として『国性爺合戦』が享受されていたことを示していよう。そして、青本や黒本では淨瑠璃三段目が簡略化され、青本や黄表紙で老母自害が絵文共に省略され、合巻においても絵画化されていないことは、三段目は淨瑠璃では愛好されたものの、江戸草双紙享受者層には、老母自害は画面としては選ばれなかつたと考えられる。また、青本、黒本、黄表紙の描かれ方や、合巻表紙の描かれ方より、江戸では『国性爺合戦』は、市川家の歌舞伎荒事と結びつけた形で受容され続けたものと思われる。

また黒本では、九仙山から見た戦闘場面が、浮世草子や青本のように吳三桂らより小さく描かれるのではなく、国性爺の活躍を中心にして他の場面の人物と同じ大きさで描かれている部分がある（図22）。これは歌舞伎荒事的な描写への嗜好と共に、江戸では九仙山のからくりによる戦闘場面上演が伝承されなかつたとも想像される。黄表紙や合巻で、九仙山から見える戦闘場面が全く描かれていないことは、この可能性を更に強める。

そして、青本や黄表紙、更に合巻の後摺り本の例に見られるように、淨瑠璃抄録物草双紙は、享保の改革による方向付けで、草双紙の題材として淨瑠璃が多く選択され、寛政の改革の出版統制から逃れるために、そして統制が強くなるごとに、安全な出版物として刊行されたものと考えられる。

### （注）

（1）「関西大学所蔵初期草双紙一覧」（神楽岡幼子・「関西大学図書館影印叢書 青本黒本集」第一期第七巻・平成九年刊・一九九七・関西大学出版部）に「国性爺合戦」とされる。「歌舞伎文化の享受と展開」（神楽岡幼子・平成十四年刊・二〇〇二・八木書店）に、青本『国せんや合戦』全丁の写真版と解題が載る。

（2）黒本『こく性や合戦』の全丁写真版翻刻と書誌は、「『こく性や合戦』について」（昭和63年度科学研究費による「江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究」報告書）所収・平成元年二月刊・一九八九）で行った。なお、「国書総目録」によるもう一書である東北大学狩野文庫本は、後表紙であるため、原表紙を有する本書により黒本とした。

（3）「歌舞伎文化の享受と展開」所収の解題による。  
 （4）「外題も版式も、前（『頬光一代記』引用者注）と異なり、普

通の形式であるが、絵はいかにも古風である。これは二代目團十郎の國性爺竹抜五郎の時の作でないかと思はれる。すると享保十二年の作である（水谷不倒・昭和九年刊・一九三四年。後に自筆訂正本から『水谷不倒著作集』第二卷所収・昭和四十八年刊・一九七三年・中央公論社）とされている。

(5)

黒本『こく性や合戦』と青本『国せんや合戦』の鳴蛤と虎退治の構図の類似については、「黒本・青本と淨瑠璃絵尽し本——黒本『こく性や合戦』をめぐつて——」（国際日本文学研究資料館会議録）

第12回所収・平成元年刊・一九八九年・国文学研究資料館）で論じた。

(6)

『東都劇場沿革誌料』上・関根只誠・明治二十六年頃成・一八九三年・国立劇場芸能調査室編。

(7)

安政二年成・一八五五年・「日本庶民文化史料集成」第六卷所収・昭和四八年刊・一九七三年・三一書房。

(8)

『六段本『こくせんやぐんき』と浮世草子挿絵』（高橋則子・『調査研究報告』二十二号所収・平成十三年九月刊・二〇〇一年・国文学研究資料館）。

(9)

『草子屋仮説』（浜田啓介・『江戸文学』八号所収・平成四年三月刊・一九九二年・ペリカン社）、『寛永期の淨瑠璃』（秋本鈴史・『岩波講座 歌舞伎・文楽 第七卷 淨瑠璃の誕生と古淨瑠璃』所収・平成十年刊・一九九八年）。

(10) 『御触書天保集成』下・百三（昭和十六年刊・一九四一年・岩波書店）所収。

(11) 『旧幕府引継書影印叢刊4享保撰要類集』第四卷（昭和六十一一年刊・一九八六年・野上出版）所収。

(12) 『赤小本から青本まで——出版物の側面』（木村八重子・『草双紙集』所収・新日本古典文学大系・平成九年刊・一九九七年・岩波書店）に、享保の改革による通達に沿って、子供を対象にすると標榜し淨瑠璃に取材した草双紙が多くなったのではないか、とある。

(13) 『墨川亭雪磨活動年譜稿』（佐藤至子・『江戸の絵入小説』所収・平成十三年刊・二〇〇一年・ペリカン社）に、前半三巻の草稿

に天保二年の年記があること、後摺り本二種のうち、天保の改革のために表紙が墨摺りの役者似顔絵でないものと、嘉永年間刊行で多色摺り表紙が八代目團十郎の似顔象嵌になっているものがあること、どちらの後摺り本も二十六丁裏から二十八丁表までが、一部削除されているとの言及がある。

(14)

本書の後摺り本における九仙山場面の一部削除とは、観客や太夫・人形遣い等のあらすじに関係しない登場人物を削除したものである。

(15)

信多純一氏（『新潮日本古典集成 近松門左衛門集』解説・昭和六十一年刊・一九八六年・新潮社）によると、九仙山は付舞台で、小人形を用いてのからくりで見せたものであることが推定される。山田和人氏も「人形・からくり」（『岩波講座 歌舞伎・文楽 第八卷 近松の時代』所収・平成十年刊・一九九八年・岩波書店）、「劇場・舞台——『国性爺後日合戦』の舞台と人形」（『国文学』・平成十四年五月刊・二〇〇二年・学燈社）で同じ立場を取る。

(16)

『興行』（池山晃・『国文学』・平成十四年五月刊・二〇〇二年・学燈社）。

(17)

『淨瑠璃本——その需要と供給』（長友千代治・『岩波講座 歌舞伎・文楽 第九卷 黄金時代の淨瑠璃とその後』所収・平成十年刊・一九九八年・岩波書店）、「淨瑠璃の受容」「読物としての淨瑠璃本」（長友千代治・『近世上方淨瑠璃本出版の研究』所収・平成十一年刊・一九九九年・東京堂出版）。

#### （図版リスト）

① 青本『国せんや合戦』 六丁表。関西大学図書館蔵。  
② 黒本『こく性や合戦』 一丁表。国立国会図書館蔵。

③ 青本『国せんや合戦』 八丁裏・九丁表。関西大学図書館蔵。

④ 黒本『こく性や合戦』 三丁裏・四丁表。国立国会図書館蔵。

⑤ 青本『国せんや合戦』 九丁裏・十丁表。関西大学図書館蔵。

- (6) 黒本『こく性や合戦』五丁裏。国立国会図書館蔵。
- (7) 青本『国せんや合戦』十六丁裏・十七丁表。関西大学図書館蔵。
- (8) 黒本『こく性や合戦』八丁裏・九丁表。国立国会図書館蔵。
- (9) 『金之揮』七丁裏。享保二年五月の図。国立国会図書館蔵。
- (10) 鳥居清倍画・大判墨摺絵。『歌舞伎図説』(昭和六年刊・一九三一・萬葉閣)一一より転載。
- (11) 『金之揮』十九丁裏。享保十二年三月の図。国立国会図書館蔵。
- (12) 鳥居清倍筆・細判漆絵・横山町近江屋。『シンドラー・コレクショーン浮世絵名品展』(昭和六十年刊・一九八五・日本浮世絵協会・日本経済新聞社)3より転載。
- (13) 画者未詳・細判墨摺筆彩絵。『ベルリン国立博物館所蔵 名作浮世絵展』(昭和四八年刊・一九七三)二十九より転載。
- (14) 奥村政信画・細判紅摺絵。東京国立博物館蔵。
- (15) 鳥居清広画・細判紅摺絵。『浮世絵衆花 ポートランド美術館』(昭和五十六年刊・一九八一・小学館)十より転載。
- (16) A 黄表紙『和藤内三舛若衆』一二丁裏・三丁表。国立国会図書館蔵。
- B 青本『国せんや合戦』一丁裏・二丁表。関西大学図書館蔵。
- (17) A 黄表紙『国性爺合戦』十七丁裏・十八丁表。架蔵。
- B 青本『国せんや合戦』十二丁裏・十三丁表。関西大学図書館蔵。
- (18) A 黄表紙『国性爺合戦』十八丁裏・十九丁表。架蔵。
- B 青本『国せんや合戦』十三丁裏・十四丁表。関西大学図書館蔵。
- (19) 黄表紙『和藤内三舛若衆』一丁表。国立国会図書館蔵。
- (20) 合巻『国性爺合戦』二十六丁裏・二十七丁表。国立国会図書館蔵。
- (21) 合巻『国性爺合戦』二十七丁裏・二十八丁表。国立国会図書館蔵。
- (22) 黒本『こく性や合戦』十丁裏・十一丁表。国立国会図書館蔵。

本稿を成すにあたり、図版掲載をご許可下さいました、関西大学  
図書館・国立国会図書館・東京国立博物館に感謝いたします。

(客員研究員・国文学研究資料館助教授)





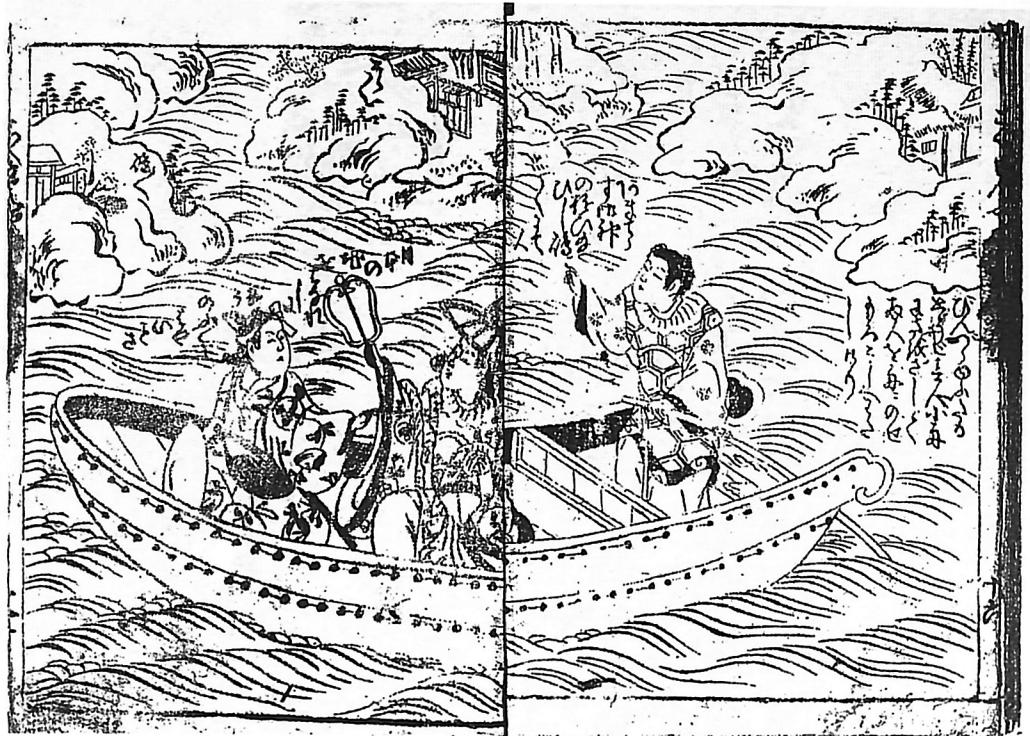
(5)



(6)



## 江戸における『国性爺合戦』の受容—淨瑠璃抄録物草双紙の視点から—







14



12



15



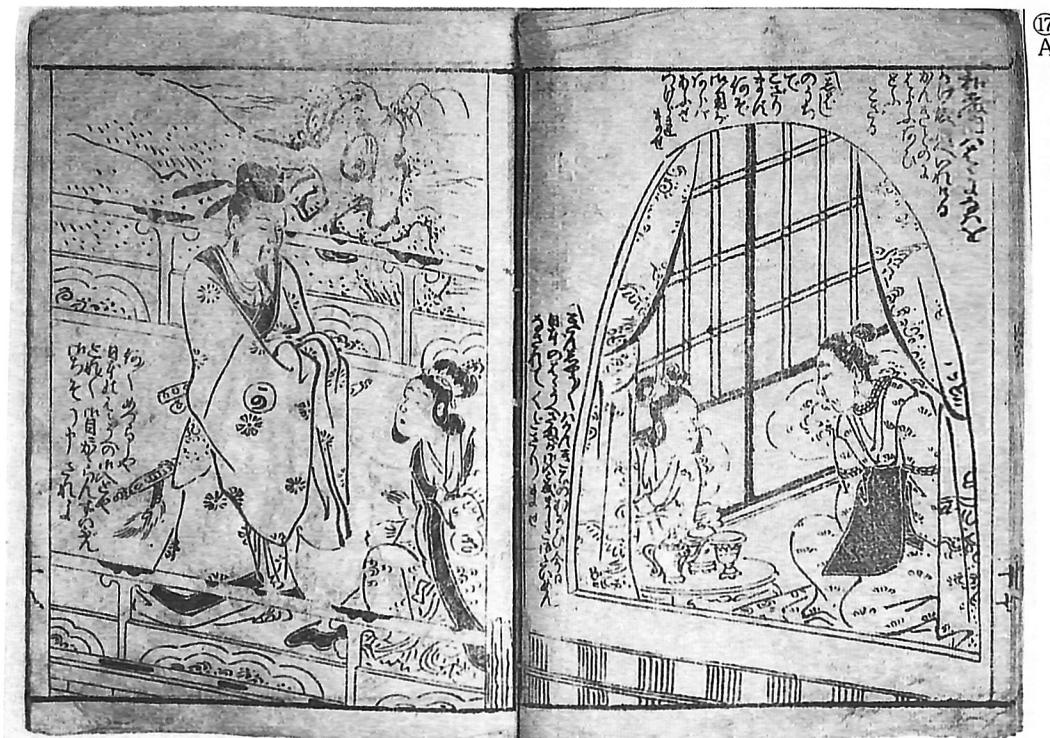
13

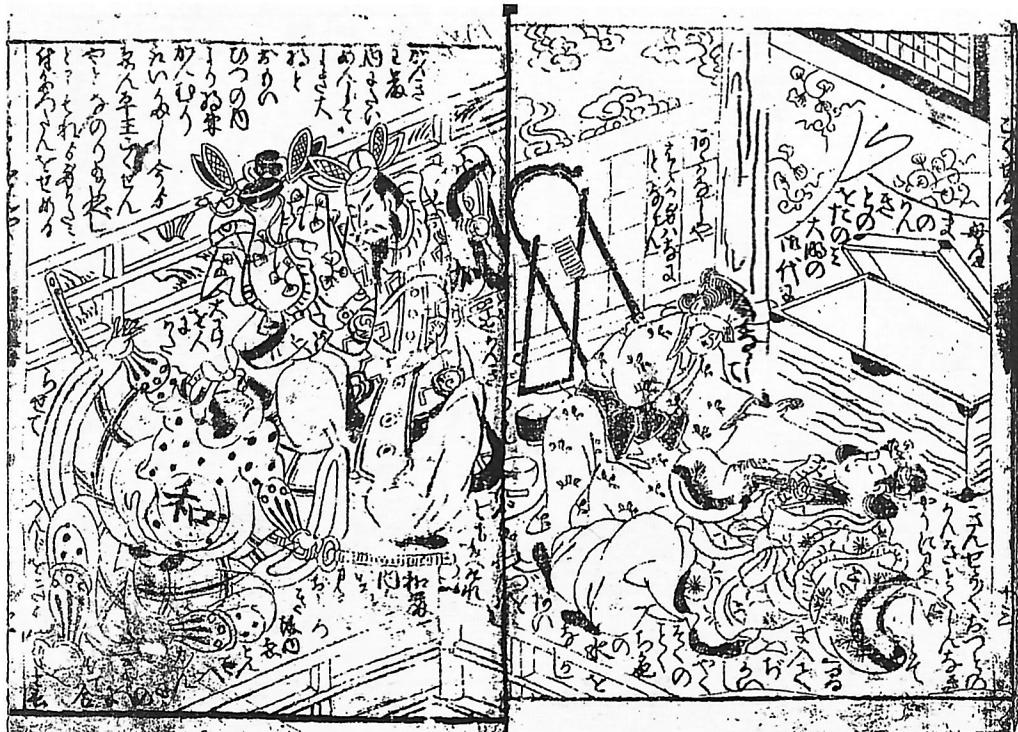


16  
A



16  
B





江戸における『国性爺合戦』の受容—静瑠璃抄録物草双紙の視点から—

